

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24242006

研究課題名(和文) 仁寿舍利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究

研究課題名(英文) Studies on the faith and decoration on Renshou relicuary tower in the Sui dynasties.

研究代表者

加島 勝 (KASHIMA, Masaru)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：80214295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、隋文帝が仁寿元年(601)から三度にわたり中国全土に詔した仁寿舍利塔の起塔地と関係遺物に関する現地調査を(1)起塔地の隋以前の歴史(2)舍利荘厳における儒仏道の習合的意味、(3)仁寿舍利塔の受容史、という新しい観点から総合的に実施し、その結果第1回目の仁寿舍利塔起塔地30箇所について、現在地の特定、関連遺物、周辺の景観等の面から、仁寿舍利塔事業の全体像の一端を具体的にあきらかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research and study, we focused the faith of Sarira(Buddha's bone) and the stupas that was built by the Emperor Wen's order in the year 601AD-604AD. Our research team that members was specialist of art history, archeology, history, and conservation science has done a field in China and Vietnam, from the viewpoint of [prehistory of the stupa location] [meaning of syncretistic fusion of Confucianism and Buddhism], [history of faith of Sarira]. As a result we revealed identified present location, involved relics, landscape of stupas, about the 30 stupas that was built in the year 601AD.

研究分野：仏教工芸史

キーワード：仁寿舍利塔 中国美術 仏舎利信仰 荘厳 舍利容器 隋時代 仏塔 文帝

1. 研究開始当初の背景

隋文帝は、仁寿元年(601)から三度にわたり中国全土に舍利塔を建立した(仁寿舍利塔)。唐代に続く諸州一斉の仏教事業の端緒を拓くという重大な意義のあるこの事業については、戦前から文献に基づいた研究がなされてきた。これに対し研究代表者は、中国での詳細な現地調査を内容とした、基盤研究(B)「隋唐時代の仏舎利信仰と荘嚴に関する総合的調査研究」(2009~2011年度)を組織し、舎利荘嚴、舍利塔の立地、事業の思想背景について総合的な調査研究をおこなった。本研究はその成果を継承し、さらに発展させる目的で企画されたものである。

『廣弘明集』卷十七によれば、仁寿舍利塔は北周武帝による廢仏からの復仏を文帝が成し遂げるといふ乳母神尼の予言に応えるべく文帝が企図したものである。西へ去った神明は復仏によって帰還すると神尼は予言した。また同書によれば、文帝は毎年自身の誕生日に父母の恩に報いるため福善を修した。文帝が舍利塔建立詔をその日に発布したのは、父母への報恩という意味を込めたからだと考えられる。つまり、この事業は文帝にとり、復仏・神明の召還・父母への報恩という三つの意義があった。この三つはそれぞれ仏教、神仙思想(道教)、儒教に対応する問題である。仁寿舍利塔研究の意義は、儒仏道という三つの思潮が、起塔という事業においていかに具体化されているかを解明することだといえる。その問題には以下の三点からアプローチできる。

〔場所〕文帝は第一回目の起塔にあたり16の寺院を自ら注し塔を建てるよう指示した。先の研究において、本研究グループはこれらの寺院のうち、岐州鳳泉寺、雍州仙遊寺、嵩州嵩岳寺、泰州岱岳寺、定州恒岳寺、廊州連雲岳寺、牟州巨神山寺、呉州会稽山寺、蒲州栖巖寺、蘇州虎丘山寺、涇州大興国寺の11ヶ寺を現地調査し、そのうち、7ヶ寺で起塔

地をほぼ特定した。これらの成果により、文帝が自注した寺は、a. 神山に付属する、b. 神仙的伝統を有する、c. 神廟に近接する、d. 古代堪輿術(風水思想)に適う地形の中にある、という特色を持つことが明らかになった。また、自注寺院ではないものの第一回目の起塔地である秦州静念寺は麦積山石窟に付属する瑞応寺であることを確認した。つまり、起塔地は、e. 石窟に付属する、という条件を備える場合もある。これらから、起塔地は、隋以前から続く古い宗教的歴史を持つ土地が選ばれていることが明らかになった。このことは舍利塔の建立が神明の召還を目的としていたことと特に関連し、神明の感応を呼ぶ土地が選ばれたと理解するのが適切である。

〔表現〕仁寿舍利塔の現存する唯一の遺物である陝西省耀州神徳寺址出土の舍利石函の拓本を入手し、図様について詳細に分析を加えた。神徳寺舍利石函の南北面には、舍利容器及び宝珠に向かい悲嘆する金剛力士と十大弟子が描かれている。舎利荘嚴の意味は、舎利図像を生む舎利観、葬礼における悲嘆の身振りとの関係がここに見いだされる。また、『廣弘明集』には、石函が山水・仙人・麒麟などの図様をあらわしたとする事例(徐州浄道寺)がある。石函の図様は、儒仏道の習合という観点から分析される必要がある。

〔受容〕仁寿舍利塔址に遺存する、栖巖道場塔碑(栖巖寺、陝西省)、重修廣福寺記(勝福寺、山東省)、龍蔵寺碑(河北省)、往生碑(大禹寺、浙江省)などの碑文の文字情報を採取し読解に努めた。これらの碑文は、仁寿舍利塔が、同時代あるいはその後の時代にどのように受け止められていたのかを示すものである。また、仁寿舍利塔には後に重修がおこなわれている事例がある(雍州仙遊寺、涇州大興国寺、蔣州棲霞寺)。このことは、仁寿舍利塔が後代にも崇敬を失わなかったことを示しているが、その際に、塔形や器形を変化させてあらたな起塔や埋納がおこな

われている場合がある。特に涇州大興国寺では、内容が棺形となるという重大な変化が生じている。これは、その時代の思想に基づいて器形が選ばれた結果である。ここから仁寿舍利塔をめぐる後代の受容史という問題の重要性が浮かび上がる。

本研究は、前研究において生じた以上のような問題意識に基づき、仁寿舍利塔に対して新たな分析を加えるために企画された。

2. 研究の目的

大乘仏教における最も重要な礼拝対象である仏舍利（釈迦の遺骨）は、古代インドはもとよりアジアの各地域、各時代の信仰を反映しつつ様々に荘厳された。中でも隋文帝が仁寿元年（601）から三度にわたり中国全土に建立した仁寿舍利塔は、その後の諸州一斉の仏教事業の端緒を拓く、中国仏教造形史上きわめて重要な出来事である。本研究は仁寿舍利塔起塔地と関係遺物に関する現地調査を実施し、これにより得られた基礎資料を美術史（彫刻史、絵画史、工芸史）、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究者が協働で、（1）起塔地の隋以前の歴史、（2）舍利荘厳における儒仏道の習合的意味、（3）仁寿舍利塔の受容史、という新しい観点から総合的に分析し、従来不明な点が多かった仁寿舍利塔の信仰と荘厳の全体像の具体的な解明を目的としている。

3. 研究の方法

本研究で重視する観点は、2. 研究の目的の項で述べたように第一には起塔地の隋以前の歴史、第二には舍利荘厳における儒仏の習合的意味、第三には仁寿舍利塔の受容史である。

（1）起塔地の隋以前の歴史

文帝の自注寺院には五岳に付属する寺院がすべて含まれており、また、会稽山寺や虎丘山寺という神仙思想の伝統が濃厚な寺院もその中にある。それに加え、涇州大興国寺

の場合は寺の正面に西王母が降臨する山として著名な回山が存在する。このように見ると自注寺院は、現在はその意味を失っていても、すべてが本来は神仙的な意味を有していたという見通しが生まれる。本研究では、未調査の自注寺院（華州思覺寺、衡州衡岳寺、同州大興国寺、并州無量寿寺、相州大慈寺、襄州大興国寺）を現地調査するとともに、三度にわたる起塔寺院11ヶ寺を可能な限り現地調査し、起塔地の神仙的な意味をより精緻に解明してゆく。仁寿舍利塔址は、現在まったくその痕跡を失っている場合も少なくないが、地方誌などに残されたわずかな手掛かりを中国側研究協力者と協働して収集し、現地調査によって起塔地の特定を図る。

（2）舍利荘厳の習合的意味

『廣弘明集』には、埋納に際し沙門が舍利瓶を掲げると人々が号泣したとあり、また陝州舍利の埋納では道俗が悲号すると一時に雲が起こったとある。このように仁寿舍利の埋納には儒教的な誠意が神仙の感応を引き起こすという図式がある。神徳寺舍利石函の図様に仏教のみならず儒教や神仙的な内容が含まれるのはそれが理由だと考えられる。舍利・宝珠図像ならびに墓制遺構・遺品との比較研究により、この図様の位相をより精緻に解明する。また、覆斗形の蓋を持つ方形の舍利容器は、印箱の外形や石窟窟内の空間と形態が類似している。舍利容器の形に象徴性のあることがここから浮かび上がる。関連する器物や石窟を広く調査して、その意味を解明する。

（3）仁寿舍利塔の受容史

①碑文の調査：仁寿舍利塔址には起塔後に建てられた碑が残存している可能性がある。現地調査によってそうした碑の発見に努め、碑文を採取し後世の仁寿舍利塔への見方を復元する。

②重修の追跡：仁寿舍利塔が重修されている事例を追跡し、後代の者が仁寿舍利塔を崇

敬し続けるとき、何を継承し何を変容させたのかという具体相を明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題は、隋文帝が仁寿元年（601）から三度にわたり中国全土111州に起塔した起塔地と関係遺物に関する中国での現地調査を4カ年にわたって実施し、これにより得られた基礎資料を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究者が協働で（1）起塔地の隋以前の歴史、（2）舍利莊嚴における儒仏道の習合的意味、（3）仁寿舍利塔の受容史、という新しい観点から総合的に分析し、従来不明な点が多かった仁寿舍利塔の信仰と莊嚴の全体像の具体的解明を試みた。各年度の調査成果の概要は以下の通りである。

（1）平成24年度（2012）

陝西省・甘肅省・四川省・重慶市を対象地域とし、起塔地での調査と遺物調査を行なった。その結果、同州大興国寺（陝西省渭南市大荔県）、隴州薬王寺（同省宝鶏市隴県）、利州大興国寺（四川省広元市千仏崖）、梓州華林寺（四川省成都市三台県）、益州法聚寺（四川省成都市新都区）、涇州大興国寺（甘肅省平涼市涇川県）、瓜州崇教寺（同省敦煌市）の7カ所の起塔地をほぼ特定することができた。なかでも同州大興国寺と涇州大興国寺の2カ寺は仁寿元年の文帝自注（文帝自らが立地場所を指定した）寺院であり、さらに涼州大興国寺は天授元年（690）に則天武后が全国諸州に設けた大雲寺の前身寺院でもあり、その立地場所が特定できたことは重要である。

（2）平成25年度（2013）

ベトナム（ホーチミン市・ハノイ市・バクニン省）、中国（湖南省・広西チワン族自治区・広東省）を対象地域とし、起塔地での調査と遺物調査を行なった。その結果、公州禪衆寺（ベトナム・バクニン省トゥアンタイ県）、潭州麓山寺（湖南省長沙市）、衡州衡岳寺（湖南省衡陽市）、桂州緑化寺（広西チワン族自治区

桂林市）の4カ寺は仁寿元年の第1回目の起塔地であり、特に衡州衡岳寺は文帝自注寺院である。また当時中国領であったベトナムの公州禪寺址から最近発見された舍利塔銘と石函を実査できたことは仁寿舍利塔の埋納品の実態を解明する上で特筆すべき成果である。

（3）平成26年度（2014）

陝西省・山西省・遼寧省を対象地域とし、起塔地の立地調査と遺物調査を行なった。その結果大興県龍池寺（西安市長安区）、澤州古賢谷景浄寺（山西省晋城市陵川県）、韓州修寂寺（山西省襄垣県）、并州無量寿寺（山西省太原市）、營州梵幢寺（遼寧省朝陽市）の5カ寺の起塔地をほぼ特定することができた。中でも大興県龍池寺、并州無量寿寺の2カ寺は仁寿元年の第1回目の起塔地であり、特に并州無量寿寺は文帝自注寺院である。また仁寿2年の第2回目の起塔地である營州梵幢寺は最も北に位置する仁寿舍利塔で、遼代に重修された際に経筒が埋納されており、法身舍利としての経典が真身舎利の仏舎利と同じように信仰されたことがわかったことは、経筒や経箱の莊嚴の変遷と仏舎利莊嚴の比較研究という今後の新たな研究の糸口の発見として注目される。

（4）平成27年度（2015）

湖北省・河南省・安徽省を対象地域とし、起塔地の立地調査と遺物調査を行なった。その結果、隋州智門寺（湖北省随州市）と鄧州大興国寺（湖北省鄧州市）2カ寺の起塔地をほぼ特定することができた。このうち隋州智門寺は仁寿元年の文帝自注寺院である。付近には、現在、清代に重修された文峰塔が建っている。北宋時代に建立とされるが、その周辺（地宮か）からは唐代のいずれも銅製の獅子鎮柄香炉、塔鉢、柘榴形水瓶（随州市博物館蔵）が出土しており、それ以前に遡って寺が存在したとみて間違いなからう。

以上のように本課題研究の実施により、文帝自ら起塔地を指定した16カ寺（文帝自注

寺院)を含む仁寿元年の第1回目の起塔地30カ所に関する現在寺名・遺跡名、舍利奉送僧、寺史、関係文物、参考文献からなる詳細な史料集成を完成することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

- ① 大島幸代「退敵の毘沙門天と土地の靈験説話—唐末五代期の毘沙門天像の位置づけをめぐる—」、『仏教文明と世俗秩序国家・社会・聖地の形成』1巻、査読無、293頁 - 326頁、2015年
- ② 泉武夫「山林の絵画表現と仏教荘嚴」、『空間史叢書』2号、査読無、5頁 - 40頁、2015年
- ③ 泉武夫「栖雲寺の画像をめぐる—」、『中国江南マニ教絵画研究』1巻、査読無、183頁 - 195頁、2015年
- ④ 東野治之「陽劔・陰劔の象嵌銘とその書風」、『国宝東大寺金堂鎮壇具保存修理報告書』1巻、査読無、285頁 - 287頁、2015年
- ⑤ 東野治之「幕末に発行された法隆寺の紙幣」、『聖徳』223号、査読無、17頁 - 24頁、2015年
- ⑥ 東野治之「法隆寺と聖徳太子」、『法隆寺展—聖徳太子と平和の祈り』1巻、査読無、12頁 - 15頁、2014年、
- ⑦ 東野治之「那須国造碑を読み解く」、『那須国造碑—時代と人を結ぶもの—』1巻、査読無、82頁 - 85頁、2014年
- ⑧ 岡林孝作「古墳出土鏝の使用法」、『橿原考古学研究所論集』16号、査読無、111頁 - 122頁、2013年
- ⑨ 東野治之「法隆寺金堂薬師像の光背銘と天寿国繡帳の銘文」、『橿原考古学研究所論集』16号、査読無、165頁 - 169頁、2013年
- ⑩ 東野治之「正木直彦が法隆寺に贈った百済の石灯籠」、『聖徳』216号、査読無、11頁 - 14頁、2013年
- ⑪ 泉武夫「中尊寺藏金字経見返絵の絵師分担について」、『仏教芸術』329号、査読有、45頁 - 82頁、2013年
- ⑫ 松本伸之「千景万食—夏・殷から宋までの中国歴代王朝の出土文物をめぐる—」、『日中国交正常化40周年記念 特別展 中国 王朝の至宝』、NHK・NHKプロモーション・毎日新聞社、査読無、10頁 - 20頁、2012年
- ⑬ 長岡龍作「蓮華蔵世界と観音」、『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』10号、査読無、2012年、41頁 - 57頁

[学会発表] (計8件)

- ① 長岡龍作「大乘仏教と東アジアの他者表

象」、檀国大学校日本研究所国際学術シンポジウム(招待講演)、檀国大学校(韓国京畿道龍仁市)、2014年10月31日

- ② 大島幸代「唐末五代期の毘沙門天信仰の変容について」、若手アジア史論壇シンポジウム「アジアの王権と仏教」、奈良女子大学(奈良県奈良市)、2014年9月1日
- ③ 加島勝「ベトナム・バクニン省博物館所蔵の舍利塔下銘と石函—特に石函の形式的特色を中心に—」、科学研究費補助金(基盤研究(A))「文明移動としての「仏教」からみた東アジアの差異と共生の研究」特別研究集会(招待講演)、早稲田大学(東京都新宿区)、2014年7月18日
- ④ 加島勝「古代東アジアの真鍮製品」、科学研究費補助金基盤研究(A)「5~9世紀東アジア金銅仏に関する日韓共同研究」(研究代表者:藤岡穰)第2回公開セミナー、大阪大学(大阪府豊中市)、2014年3月21日
- ⑤ 長岡龍作「仏像の顔と仏教信仰」、日本顔学会フォーラム顔学、東北大学(宮城県仙台市)、2013年11月9日
- ⑥ 和田浩「津波で被災した資料の一時保管環境の改善過程—」、東アジア文化遺産保存学会、韓国慶州市、2013年9月5日
- ⑦ 和田浩「陸前高田市立博物館における一時保管環境の改善過程」、文化財保存修復学会、東北大学(宮城県仙台市)、2013年7月20日
- ⑧ 長岡龍作「Buddhist Soteriology and The Functions of Figurative Art」、33rd Congress of the International Committee of the History of Art, Nuremberg(Germany)、2012年7月16日

[図書] (計19件)

- ① 加島勝『日中古代仏教工芸史研究』(単著)、雄山閣、294頁、2016年
- ② 加島勝『仁寿舍利塔の信仰と荘嚴に関する総合的調査研究』研究成果報告書、2016、132頁
- ③ 長岡龍作『仏教文明と世界秩序・国家・社会・聖地の形成』(共著)、勉誠出版、327頁 - 358頁(616頁のうち)、2015年
- ④ 東野治之『史料学探訪』(単著)、岩波書店、251頁、2015年
- ⑤ 加島勝『相模原市史』(共著)、相模原市、208頁 - 211頁(549頁のうち)、2015年
- ⑥ 泉武夫(責任編集)『日本美術全集第5巻 王朝絵巻と貴族のいとなみ』、小学館、286頁、2014年
- ⑦ 長岡龍作『仏教美術論集 5 機能論—つくる・つかう・つたえる—』(共著)、竹林舎、200頁 - 223頁(429頁のうち)、2014年
- ⑧ 泉武夫『仏教美術論集 5 機能論—つくる・つかう・つたえる—』(共著)、竹林舎、28頁 - 43頁(429頁のうち)、2014

- 年
- ⑨ 加島勝『仏教美術論集 5 機能論—つくる・つかう・つたえる—』(共著)、竹林舎、331 頁 - 344 頁 (429 頁のうち)、2014 年
 - ⑩ 長岡龍作『講座東北の歴史 第 5 巻 信仰と芸能』(共著)、清文堂出版、75 頁 - 107 頁 (397 頁のうち)、2014 年
 - ⑪ 長岡龍作『仏像—祈りと風景—』(単著)、敬文社、319 頁、2014 年
 - ⑫ 東野治之『飛鳥と斑鳩—道で結ばれた宮と寺—』(共著)、ナカニシヤ出版、69 頁 - 83 頁 (87 頁のうち)、2013 年
 - ⑬ 長岡龍作『空間史学叢書 1 痕跡と叙述』(共著)、岩田書院、45 頁 - 68 頁 (220 頁のうち)、2013 年
 - ⑭ 加島勝『川勝守・賢亮博士古希記念東方学論集』(共著)、汲古書院、347 頁 - 362 頁 (1052 頁のうち)、2013 年
 - ⑮ 泉武夫『竹を吹く人々—描かれた尺八奏者の歴史と系譜—』(単著)、東北大学出版会、129 頁、2013 年
 - ⑯ 東野治之『上宮聖徳法王帝説』(単著)、岩波書店、149 頁、2013 年
 - ⑰ 長岡龍作『中国中世仏教石刻の研究』(共著)、勉誠出版、154 頁 - 181 頁 (340 頁のうち)、2013 年
 - ⑱ 長岡龍作『日本美術全集第 2 巻 法隆寺と奈良の寺院』(責任編集)、小学館、287 頁、2012 年
 - ⑲ 長岡龍作『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える—』(共著)、勉誠出版、192 頁 - 208 頁 (525 頁のうち)、2012 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加島 勝 (KASHIMA, Masaru)
大正大学・文学部・教授
研究者番号：8 0 2 1 4 2 9 5

(2) 研究分担者

松本 伸之 (MATSUMOTO, Nobuyuki)
独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・その他部局等・副館長
研究者番号：3 0 2 2 9 5 6 2

和田 浩 (WADA, Hiroshi)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・室長
研究者番号：6 0 3 3 2 1 3 6

東野 治之 (TONO, Haruyuki)
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：8 0 0 0 0 4 9 6

泉 武夫 (IZUMI, Takeo)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：4 0 1 6 8 2 7 4

長岡 龍作 (NAGAOKA, Ryusaku)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：7 0 1 8 9 1 0 8

岡林 孝作 (OKABAYASHI, Kosaku)
奈良県立橿原考古学研究所・その他部局等・総括研究員
研究者番号：8 0 2 5 0 3 8 0

大島 幸代 (OSHIMA, Sachiyo)
龍谷大学・公私立大学の部局等・助教
研究者番号：6 0 5 8 5 6 9 4